

Interview 研究者紹介

慶應義塾大学 特任助教

大谷 碧 さん



私は昨年度より、こどもの機会均等研究センターで調査および研究に携わっております。子どもの教育がより良いものになるようにという思いのもと、日々研究を進めております。

研究活動では、今年9月にドイツで開かれた国際学会に参加しました。学会には、イギリス、アメリカなど、世界中からたくさんの研究者が参加しています。この学会で、同センター長の赤林英夫教授とともに、皆さまにご協力いただいている「お子様に関する特別調査」を使用し、祖父母世代が孫世代の教育支出や学力にあたえる影響について報告をしました。

このように、皆さまの調査へのご協力のおかげで、日本の政策改善に役立つ研究をおこない、それを世界に発信することもでき、感謝しております。今後とも、どうか調査へご協力いただけますと幸いです。

Media メディア紹介

～格差再生産 止まるか～

「日本子どもパネル調査」が、新聞記事に紹介されました。

2017/9/22朝日新聞朝刊



Editor's note 編集後記

ニュースレターの編集中に、ふと感じたことがあります。人はたやすく、過ぎたことを忘れてしまうあと。

編集後記のために、過去2年間で振り返ったところ、世の中の出来事を、数えるほどしか思い出せず、たかが2年前のことなのに、と驚きを感じました。毎日の生活の中で、去年、一昨年の出来事を記憶しておくのは、ことのほか難しい、ということなのでしょう。

「調査データを残す」とは、私たちの社会を記録し、次世代に引き継ぐ取り組みです。

パネルデータ設計・解析センターでは、毎年、同じ方

に調査への回答をお願いしておりますが、これはひとえに、忘れがちな人のいとなみを記録・検証し、後世に残す、実直な活動でもあります。ご協力いただいている皆さまのお気持ちとその軌跡を、忘れることなく、実社会に役立つ研究として発信していくことが、調査をお願いする私たちに課せられた責任だろうと、あらためて思いました。

元号も変わり、「令和」となりました。新しい時代に向けて、引き続き、皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

パネルデータ設計・解析センター
Panel Data Research Center at Keio University

慶應義塾大学
Keio University

日本子どもパネル調査 ニュースレター 2019

Japan Child Panel Survey - News Letter 2019

こどもの未来を 考えるセンター ができました。

こどもの機会均等研究センター

Center for Research on Equality of
Opportunity for Children: CREOC



2017年7月、次世代の豊かな未来のために、慶應義塾大学に「こどもの機会均等研究センター」(CREOC) が設立されました。当センターは、パネルデータ設計・解析センターと協力し、子どもの機会均等を確保するための方策について、科学的に研究をおこなう、日本で数少ないセンターです。



こどもの機会均等研究センター
Center for Research on Equality of
Opportunity for Children

CREOCのWebサイトはこちら
<https://creoc.keio.ac.jp/>



Greeting 研究責任者からのごあいさつ

慶應義塾大学が実施するパネルデータ調査の一環として、皆さまとお子さまにご協力をいただいております「お子様に関する特別調査」は、今年で10年目を迎え、延べ7444人の方が参加されました。皆さまからのご回答は、「日本子どもパネル調査(JCPS)」というデータとして、多くの研究に利用され、日本の子育て・教育政策の改善につながる貴重な財産となっております。研究グループを代表し、深く感謝申し上げます。

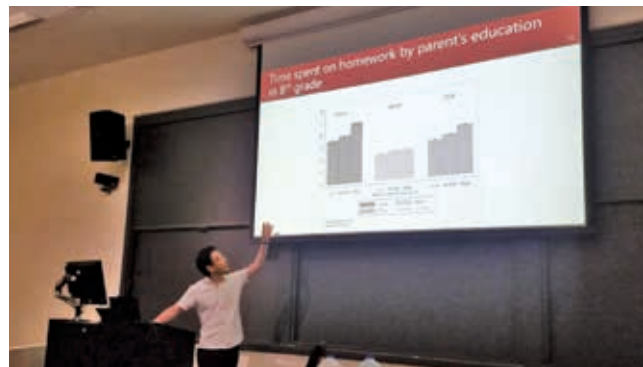
現在、メディア等で教育格差の拡大が懸念されていますが、当センターは、JCPS等のデータにもとづき、教育格差を縮小するための政策提言へ向けた研究と、そのために必要な基礎研究を進めております。その一部をご紹介します。



CREOCセンター長
赤林英夫（経済学部教授）

東アジア比較研究における発表

2019年8月：米国プリンストン大学にて、中国・米国のデータと日本のJCPSを比較し、子どもの成長や行動の差の背景を探究する研究発表をおこないました。それにより、日本の子育て・教育政策改善に向けた議論を深めることができました。



ライフコース追跡調査学会（SLLS）への参加

2018年8月：イタリア、2019年9月：ドイツでの国際学会にて、JCPSを用いた研究発表をおこないました。

小・中学生での学力テストの追加実施

2017年のニュースレターでもご紹介しましたが、2017年・2019年と2回にわたり、東京都内の25校の小・中学生が、「お子様に関する特別調査」の学力テスト実施に協力してくれました。このデータをもとに、図1のように、小1から中3までの学力の伸びを図示できるようになりました。

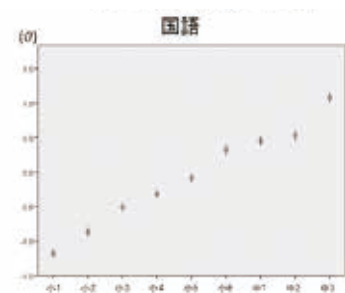


図1：個人推定学力（国語）

国際共同研究事業（ORAプログラム）

2018年12月：世界6か国（フランス、ドイツ、オランダ、英国、米国、日本）による3年間の国際共同研究が始まりました。各国から、3歳から16歳まで追跡調査したデータを持ちより、保育や家庭教育が子どもの発達に与える影響の国際比較をおこなっています。諸外国との比較を通じて、日本の子育てや政策の課題を鮮明にし、「エビデンス（根拠）にもとづいた政策立案」への貢献を目指しています。



アンケート調査の分析結果より

就学前の習いごと、なにしてる？

「習いごと」と言っても、ピアノ、そろばん、水泳など、さまざまな種類がありますが、皆さまのお子さんは習いごとをしていますか？

今回は、2016・2018年と2回にわたり、皆さまの中で「就学前のお子さまをもつお父さま・お母さま」を対象として実施した調査の結果をご紹介します。

この調査では、習いごとを「学習系」「芸術系」「スポーツ」と3つのカテゴリーにわけています。「学習系」は、そろばん、習字、英語など、「芸術系」は音楽、絵画、バレエ、お花など、そして、「スポーツ」は、水泳、体操、サッカーなどが含まれます。

図2をみると、3歳から6歳まで年齢が上がるごとに習いごとの参加率が増え、「学習系」と「芸術系」では、ほぼ同じ割合となっています。一方、ほかの習いごとと比べ、「スポーツ」に取り組んでいるお子さんは、およそ倍にのびります。

下段の日本と中国の小・中学生が対象の「放課後の時間の使い方に関する調査」では、日本の小・中学生は中国に比べ、1日に30分ほど長くスポーツをしているという結果（図3）がでており、日本は、比較的熱心にスポーツや運動に取り組む子どもが多いといえそうです。

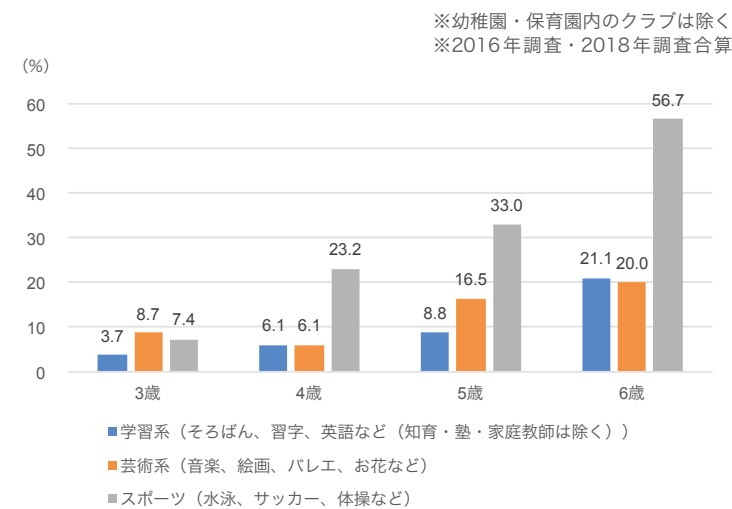


図2：未就学児「習いごとの種類・年齢」



日本と中国の小・中学生は、どんな放課後を過ごしてる？

勉強、遊び、習いごとと何かと忙しい日本の小・中学生。他の国と比べると、どう見えるのでしょうか？

図3は、過去の「日本子どもパネル調査」でのお子さまの回答と、中国での同様の調査結果をもとに、小・中学生の放課後の時間の使い方を比較したものです。

日本と中国では、「宿題」の時間に大きな差があることがわかります。中国では、学年が上がるにつれて、宿題をする時間が増えていきますが、日本では、そのような傾向はみられません。一方で、「テレビを見る」時間をみると、中国では、学年が上がるにつれて、テレビの時間は減っていき、日本では、逆に増えています。また、日本の小・中学生は、

中国と比べて、平均的に2倍長い時間を、スポーツに使っているようです。同じ小・中学生でも、国により放課後の使い方に明確な差が表れる結果となりました。

今回、ご紹介した分析には、宿題をする時間に「塾や家庭教師」は含まれていませんが、今後は、それらを含めた比較研究もおこなう予定です。また、より詳細な分析結果については、海外専門誌で出版が進められています。

皆さまのご協力のもと、さらに調査を深め、世の中にさまざまな知見を還元していくことが、本調査の重要な役割と考えています。

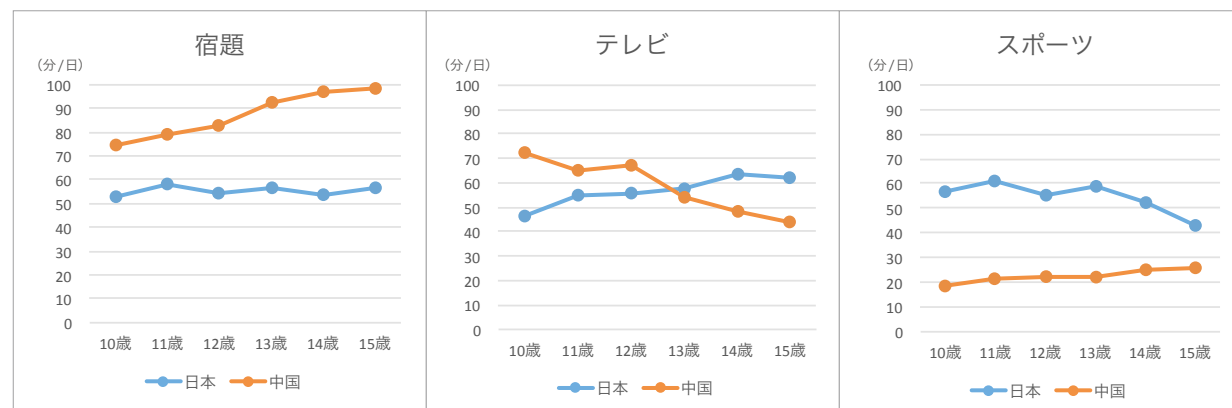


図3：日本と中国の小・中学生「放課後の時間の使い方」